

## 第1節 洪水

### 1. 概要

わが国は、夏から秋にかけて南方洋上に発生する台風の北上するコースにあたり、九州から四国、本州にかけて、風や大雨ともなう洪水によって、古くから多くの災害をこうむってきた。さらに、前線やそれを刺激する低気圧によって局地的な豪雨が発生し、さらに災害を倍加してきた。

このため、四国の太平洋側及び中央山岳部では全国でも屈指の多雨地帯となっており、中でも石鎚山南東山麓の吉野川上流域と剣山南東山麓の那賀川、奈半利川上流域で特に雨が多い。

那賀川流域は、四国の東部に位置する気候温暖な地域で年間降雨量が上流部で3,000mm以上あり、東流する下流部でも2,000mm以上に達している。

那賀川における洪水は表2-1-1に示すように、規模も大きく数多く発生している。これらの洪水は台風によるものが圧倒的に多い。

一般的に、日本に接近する台風は7月に発生する場合のほとんどは、九州西部を北上する進路をとるが、8～9月になると台風の最盛期となり、その進路も太平洋高気圧が東に後退するに従って東寄りに北上するものが多くなる。10～11月になると太平洋高気圧もずっと後退し、進路は東に移り那賀川への影響も少なくなるが、海上で勢力が衰えないまま本土を襲うケースも多い。

那賀川の洪水は、台風が最盛期で、しかも四国に近いか又は直撃のコースをとる8～9月頃に集中しており、年間総流出の大半は洪水が占めている。これらの台風による洪水は、古くは人間の介入をきらい自由ほん放な流れをしていた那賀川の河口部に沖積低地を形成してきた。

ここでは、那賀川における洪水特性及び著名な洪水が発生から終局までどのような経過で、どのような影響を与えたかについてみてみよう。

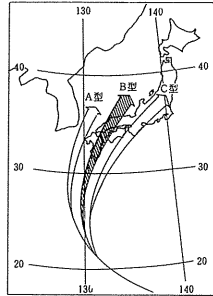


表 2-1-1 既往洪水一覧表

生起年月日	項目 流域平均2日 雨量(古庄上流)	ピーク流量 (古庄地点)	降雨原因	台風コース
S 6. 9. 26	242(mm)	3,660(m <sup>3</sup> /S)	台風	B
9. 9. 21	231	4,360	室戸台風	C
10. 8. 28	505	8,332	台風	A
12. 9. 11	273	5,120	台風	A
13. 8. 1	316	5,140	低気圧	—
16. 8. 15	305	6,860	台風14号	A
20. 9. 18	260	4,000	台風16号枕崎	A
21. 7. 30	359	5,300	台風9号	A
24. 8. 18	332	3,440	台風9号	B
25. 9. 3	393	9,023	台風28号ジェーン	C
29. 9. 14	406	5,670	台風12号ジェーン	A
34. 9. 26	228	3,464	台風15号伊勢湾	C
35. 8. 10	248	3,115	台風11号	A
35. 8. 29	454	4,735	台風16号	A
36. 9. 16	561	6,214	台風18号第2室戸	C
36. 10. 26	386	5,877	前線	—
39. 9. 25	318	3,438	台風20号	A
40. 9. 10	533	3,622	台風23号	A
42. 7. 10	299	4,273	前線	—
43. 7. 29	397	4,942	台風4号	A
45. 8. 21	384	5,732	台風10号	A
46. 8. 30	483	7,305	台風23号	A
49. 9. 9	338	3,927	台風18号	A
50. 8. 23	591	7,213	台風6号	C
51. 9. 11	609	4,510	台風17号	B

表 2-1-2 那賀川における災害年表

(徳島県災異誌より)

西 暦	発生年月日	記 事
802	延暦21年	風雨 紀伊, 淡路, 阿波, 讃岐等10国で田が流失 (類聚国史)
886	仁和2年8月	大洪水 吉野川の岩津河道南に変わる。京都大風水害 (西林村古記録)
1098	承德2年	大洪水 (西林村古記録)
1483	文明15年	大洪水 (徳島県資料年表)
1579	天正7年	大水去らぬこと三日 (阿波誌)
1582	天正10年	大洪水 (阿波誌)
1584	天正12年	大洪水 (徳島県資料年表)
1662	寛文2年	大風雨水 阿波, 讃岐, 土佐, 紀州とも大風雨水 (徳島県資料年表)
1673	延宝1年	勝浦川大水 (横瀬町史)
1678	“ 6年8月	4~5日大雨終日止まず4~6日の間西国・四国洪水大風 (山鹿素行日記)
1687	貞享4年	大風水害, 田畑の流出甚大 (蜂須賀家記)
1689	元禄2年8月	勝浦川大いに溢る (阿波誌)
1701	“ 14年8月17日	御両国大雨洪水 (徳島県資料年表) 10日程雨降りつづき山崩れ川筋変わる。吉野川舞中島全戸流出 (神領村誌)
1721	享保6年8月	風雨敗木 (蜂須賀家記)
1722	“ 7年6月23日	御両風雨洪水につき御地高 83,375石余損毛, 伊予に洪水あり (徳島県資料年表)
1728	享保13年	大風雨
1729	“ 14年	暴風雨, 大水害, 豊作物被害23万石 (阿波誌)
1731	“ 16	秋大風雨
1738	元文3年6月26日	風雨出水につき御地高 73,495石損毛, 紀州風雨 (徳島県資料年表)
1740	元文5年	大洪水 (徳島県資料年表)
1741	寛保1年	鹿兒島, 四国, 近畿, 大風雨水 (徳島県資料年表)
1746	延享3年8月	風雨洪水 (蜂須賀家記)
1748	寛延1年7月	徳島県北方で50年来にもない大出水 (野村文書)
1751	宝歴1年6月	阿波, 伊予, 讃岐風水害 (徳島県資料年表)
1771	明和8年	夏洪水
1774	安永3年	秋洪水
1775	“ 4年	大洪水
1778	天明8年	長雨の害
1837	天保8年	長雨の害
1847	弘化4年	大風雨
1848	嘉永2年	“
1849	“ 3年	“

西 曆	発 生 年 月 日	記 事
1854	安政 1年12月 4日	南海大地震，津波各所水筋くるう。
1859	“ 6年	大洪水
1860	万延 1年 4月11日	大水あり
1866	慶応 2年 2月 8日	那賀川大洪水，那賀川下流の土手切れる。
1880	明治13年	大洪水
1892	“ 25年 7月25日	高磯山が崩壊し木頭，坂州の両部落で家屋等の流失や浸水の被害出る。
1899	明治32年 6月 1日	大洪水
1912	大正元年 9月22日	大台風
1918	“ 7年 8月30日	大洪水，木材流失他被害甚大
1919	“ 8年 9月 1日	大洪水
1934	昭和 9年 9月21日	室戸台風
1936	“ 11年11月 3日	大洪水
1938	“ 13年 9月 5日	釜が谷を中心に大洪水おこる
1949	“ 24年 8月18日	ジュディス台風
1950	“ 25年 9月 3日	ジューン台風 戦後最大の洪水となった。
1951	“ 26年10月14日	ルース台風
1953	“ 28年 9月25日	13号台風
1954	“ 29年 9月14日	大洪水，高校床上浸水，地平谷崩壊其他被害甚大
1959	“ 34年 9月26日	伊勢湾台風
1960	“ 35年 8月27日	16号台風
1961	“ 36年 9月16日	第二室戸台風
1964	“ 39年 9月25日	20号台風
1968	“ 43年 7月29日	4号台風
1970	“ 45年 8月21日	10号台風
1971	“ 46年 8月30日	23号台風
1974	“ 49年 7月 6日	8号台風
1975	“ 50年 8月23日	6号台風
1976	“ 51年 9月11日	17号台風，山地崩壊により澗水長期化問題発生

表 2-1-3 過去20年間の災害（河道災害）

年度	洪水原因	古庄（最大値）		被害額（百万円）		
		水位	流量	一般	公共土木	計
34	低気圧 台風6.15（伊勢湾）号	6.15 <sup>m</sup>	( <sup>m<sup>3</sup>/S</sup> ) 3,464			
35	低気圧 台風11, 16号	6.87	4,735			
36	前線 台風18号（第2室戸）	7.39	6,214	3.8	4.0	7.8
37	-	-	-	-	-	-
38	前線 台風9号	5.00	2,346	-	-	-

年度	洪水原因	古庄（最大値）		被害額（百万円）		
		水位	流量	一般	公共土木	計
39	台風14, 20号	5.70	3,438	0.1	90.5	90.6
40	台風23, 24号	5.80	3,622	260.2	352.1	612.3
41	低気圧，前線 台風15, 19号	4.53	1,953	0.1	83.4	83.5
42	低気圧，前線	6.20	4,273	0.7	152.6	153.3
43	台風4, 10, 16号	6.19	4,942	156.8	98.8	255.6
44	前線 台風9号	4.24	1,887	0	4.0	4.0
45	低気圧 台風2, 9, 10号	6.56	5,732	35.0	156.6	191.6
46	低気圧 台風23号	7.94	7,305	513.8	321.7	835.5
47	低気圧，前線 台風9, 20号		3,289	185.1	270.9	456.0
48	台風10号		1,361	-	-	-
49	前線 台風16, 18号	5.65	3,927	113.3	657.1	770.5
50	低気圧 台風5, 6号		7,213	230.6	952.9	1,183.4
51	低気圧，前線 台風17号		4,510	94.8	1,462	1,541.0
52	前線 台風7, 9号		2,328	0	52.7	52.7
53	前線 台風8号		1,124	-	-	-

注）洪水原因は，古庄地点流量 1,000<sup>m<sup>3</sup>/sec</sup> 以上のもの

## 2. 那賀川の洪水特性

那賀川における洪水は，四国が九州並ぶ台風銀座であることから，台風による洪水が最も多く発生している。

時刻水位が測定され資料の整備されている昭和30年以降の洪水記録から，古庄地点で1,000<sup>m<sup>3</sup>/s</sup>を上まわる洪水を抽出し，洪水の頻度，雨量との関係などから，那賀川の洪水特性をみてみる。

対象とする1,000<sup>m<sup>3</sup>/s</sup>以上の洪水は，表2-1-4に示す70洪水となり，対象期間が昭和30年から昭和53年までの24年間であることから，年平均約3回発生していることになる。

この70洪水を発生月別に集計してみると，図2-1-1に示すとおり8月と9月に集中し，この2か月で年間の56%を占め，次いで7月が多い。この7～9月の3か月で全体の74%を占め，那賀川の洪水はこの3か月に集中して発生していることになる。

表 2-1-4 洪水発生数一覧表(古庄流量 1,000m<sup>3</sup>/S以上)

発生原因  
 ● 台風  
 ○ 低気圧  
 × 前線  
 △ 台風+前線

No.	発生年月日	水位(m)	流量(m <sup>3</sup> /S)	摘要	No.	発生年月日	水位(m)	流量(m <sup>3</sup> /S)	摘要
1	30. 7. 16	4.28	1,400	●	36	43. 7. 29	6.19	4,942	●
2	31. 9. 9	4.56	2,770	○	37	8. 28	4.88	2,834	●
3	9. 25	5.21	2,110	●	38	9. 26	4.68	2,485	●
4	10. 8	4.64	2,513	○	39	44. 7. 4	3.74	1,263	×
5	32. 6. 27	4.45	1,214	×	40	7. 9	4.24	1,887	×
6	8. 20	5.10	1,979	○	41	8. 22	3.92	1,599	●
7	9. 11	5.14	2,060	△	42	45. 4. 25	4.06	2,070	○
8	33. 8. 24	5.31	2,201	△	43	7. 5	3.74	1,744	△
9	9. 15	3.96	1,000	●	44	7. 8	3.75	1,755	●
10	10. 17	4.91	1,471	○	45	8. 14	4.54	2,712	●
11	34. 4. 26	4.28	1,288	○	46	8. 21	6.56	5,732	●
12	8. 8	5.67	2,804	●	47	46. 8. 4	3.59	1,370	○
13	9. 26	6.15	3,464	●	48	8. 30	7.94	7,305	●
14	11. 1	4.57	1,556	○	49	9. 11	3.41	1,151	△
15	35. 4. 19	4.08	1,175	○	50	47. 6. 8	5.20	3,123	実測○
16	8. 10	5.82	3,115	△	51	7. 5	1,928	×	
17	8. 29	6.87	4,735	△	52	7. 13	2,969	×	
18	36. 6. 26	5.50	2,906	×	53	7. 24	1,624	●	
19	9. 16	7.39	6,214	●実測	54	9. 9	3,078	○	
20	10. 26	7.23	5,877	×	55	9. 14	3,289	●	
21	38. 6. 4	4.08	1,300	×	56	48. 8. 17	1,361	●	
22	8. 9	5.00	2,346	●	57	49. 7. 7	6.65	5,418	×
23	39. 8. 23	4.80	2,034	●	58	9. 2	5.37	3,553	●
24	9. 25	5.70	3,438	●実測	59	9. 9	5.65	3,927	●
25	40. 9. 10	5.38	3,622	●	60	50. 8. 17	3,310	●	
26	9. 14	5.80	3,603	●	61	8. 23	7,213	●	
27	41. 5. 22	3.66	994	○	62	11. 15	1,872	○	
28	6. 4	3.73	1,054	×	63	51. 7. 24	1,849	●	
29	7. 1	1,035	×	64	9. 11	4,510	△		
30	8. 16	3.52	1,013	△	65	10. 20	1,244	○	
31	8. 23	4.53	1,953	●	66	52. 8. 24	1,132	●	
32	9. 19	4.21	1,622	○	67	9. 10	2,328	△	
33	9. 24	4.08	1,497	●	68	11. 17	2,155	×	
34	42. 4. 28	3.51	985	○	69	53. 6. 21	1,075	×	
35	7. 10	6.20	4,273	×	70	8. 3	1,124	●	

次に、降雨原因別にみると、台風、低気圧、前線の順に多く、70洪水のうち、それぞれ57%、23%、20%となっており、台風が半分以上を占めている。

さらに洪水規模でみると、2,000m<sup>3</sup>/s以下の洪水は台風による40洪水のうち35%、低気圧による16洪水のうち69%、前線による14洪水のうち57%を占めており、低気圧及び前線によるもの

は、全般に規模は小さく、特に大きくても6,000m<sup>3</sup>/sec以下である。台風による洪水も4,000m<sup>3</sup>/sec以下が82%を占め、台風だから規模が大きいとは必ずしもいえないが、4,000m<sup>3</sup>/sec以上の洪水の発生頻度は前線性に比べて高い。

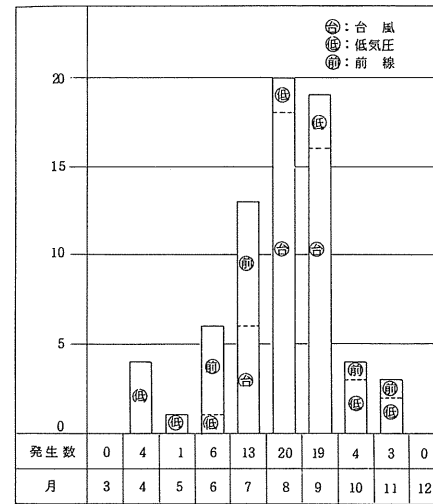


図 2-1-1 月別洪水発生数  
(古庄流量 1,000m<sup>3</sup>/S以上)  
昭和30~53年 70洪水

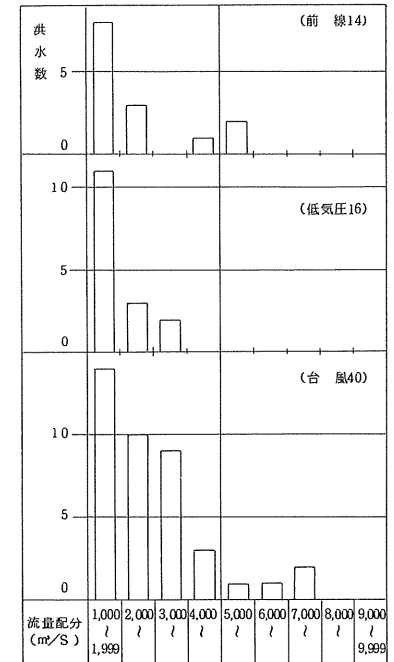


図 2-1-2 洪水原因・規模別発生頻度  
(古庄流量 1,000m<sup>3</sup>/S以上)  
昭和30~53年 70洪水

次に、主要洪水の降雨量及び地域分布状況を、2日雨量の等雨量線図で示す。

等雨量線図は、古庄基準地点におけるピーク流量の大きい方から並べ図2-1-3~14に示す。2日雨量が400mm以上となる雨域を表示し、これを基準に見ると、河口付近より上流にこの雨域があると比較的大きな規模の洪水となる。(ほぼ5,000m<sup>3</sup>/sec以上)これが上流に寄るとともに、200mmの等雨量線が上流に寄り、洪水の規模は小さくなっている。

しかし、いずれもピーク流量と400mm以上の雨域の面積とは、必ずしも一致しない。

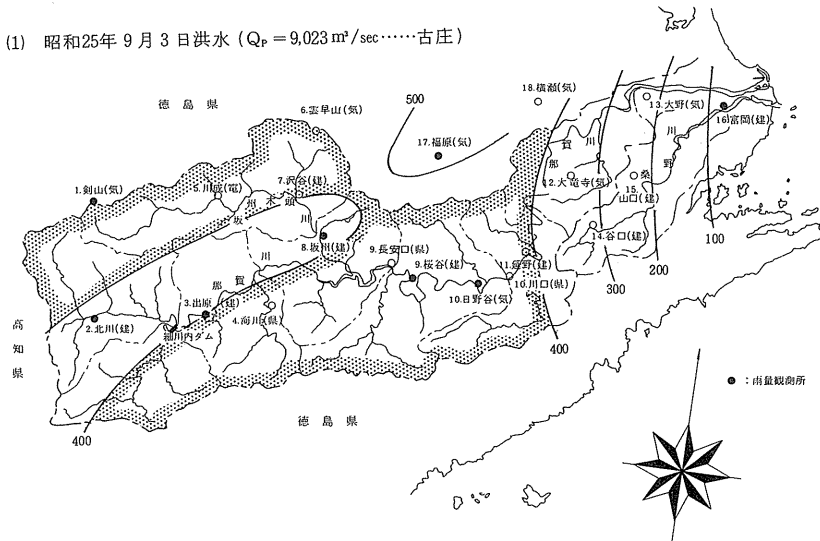
これは、降雨波形のシャープさ(集中度合)がピーク流量を支配するためであろう。

那賀川地域は、東西に細長く、高度差も1,900mに及び、地域的な相違が著しいため降雨の差が大きく、長安口ダムより上流で降雨は多い。したがって、本川上流と坂村木頭川流域のいずれに降雨があっても、古庄のピーク流量は、あまり変わらない。

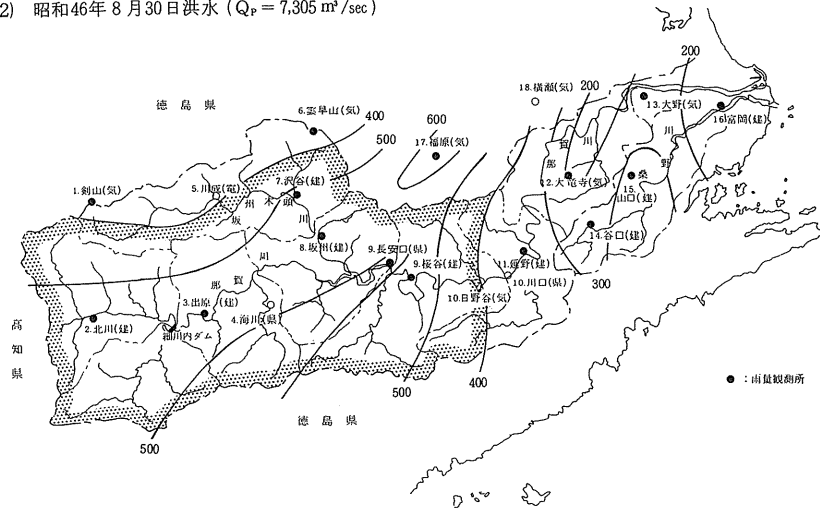
98 第2章 洪水

また、長安口ダムより下流域の降雨は、残流域面積の狭少と合流時差等により、古庄ピーク流量に、それほど強い影響は与えていない。また、規模の大きい洪水すなわち5,000 m<sup>3</sup>/sec以上の洪水の発生頻度は、70洪水中7洪水で10%、昭和30年から53年の24年間で、年平均0.3回すなわち、3年に1回となっている。

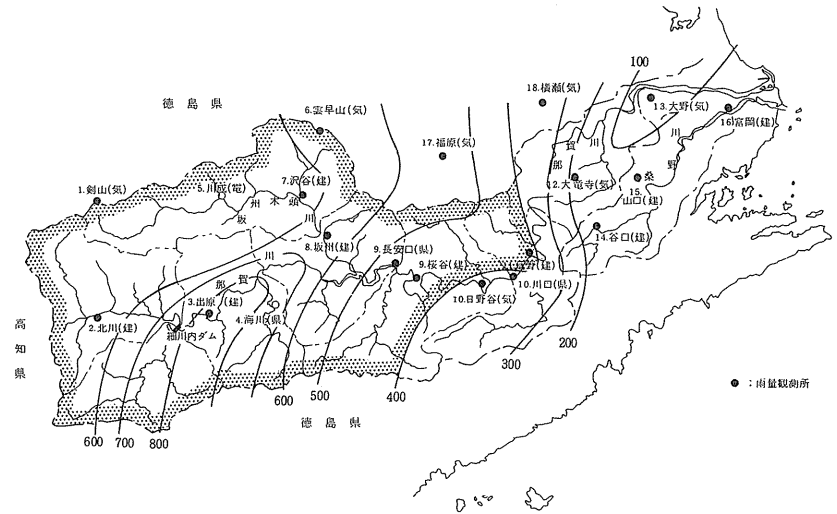
(1) 昭和25年9月3日洪水 (Q<sub>P</sub> = 9,023 m<sup>3</sup>/sec……古庄)



(2) 昭和46年8月30日洪水 (Q<sub>P</sub> = 7,305 m<sup>3</sup>/sec)



(3) 昭和36年9月16日洪水 (Q<sub>P</sub> = 6,214 m<sup>3</sup>/sec)



(4) 昭和45年8月21日洪水 (Q<sub>P</sub> = 5,732 m<sup>3</sup>/sec)

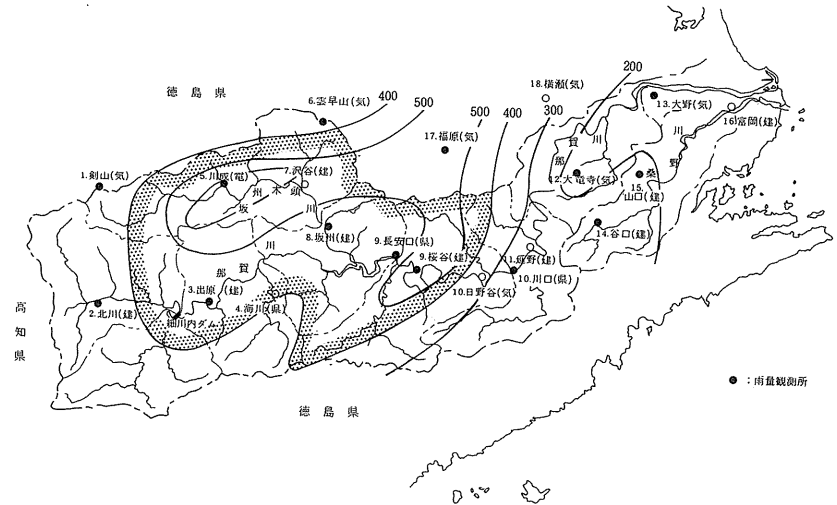
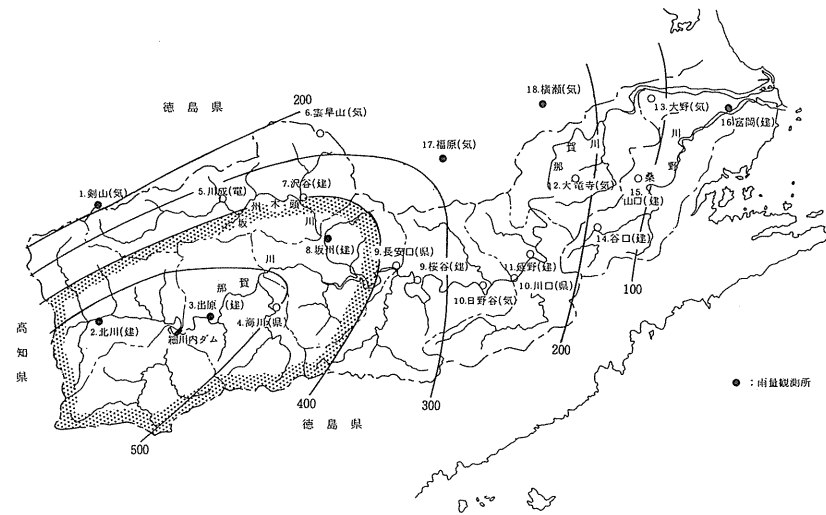
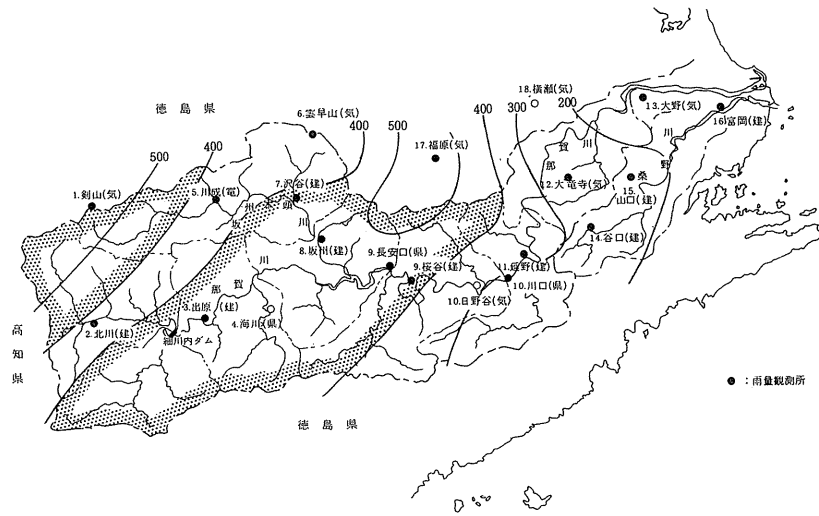


図2-1-3 2日雨量等雨量線図

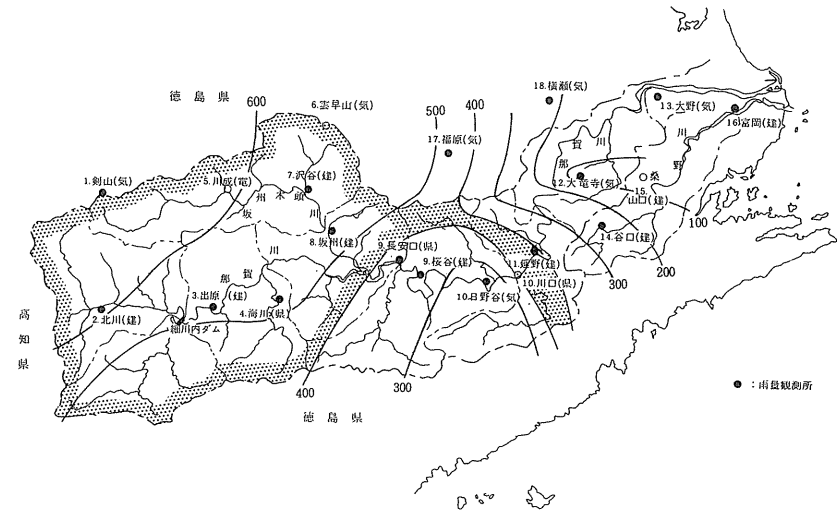
(5) 昭和29年 9月14日洪水 ( $Q_p = 5,670 \text{ m}^3/\text{sec}$ )



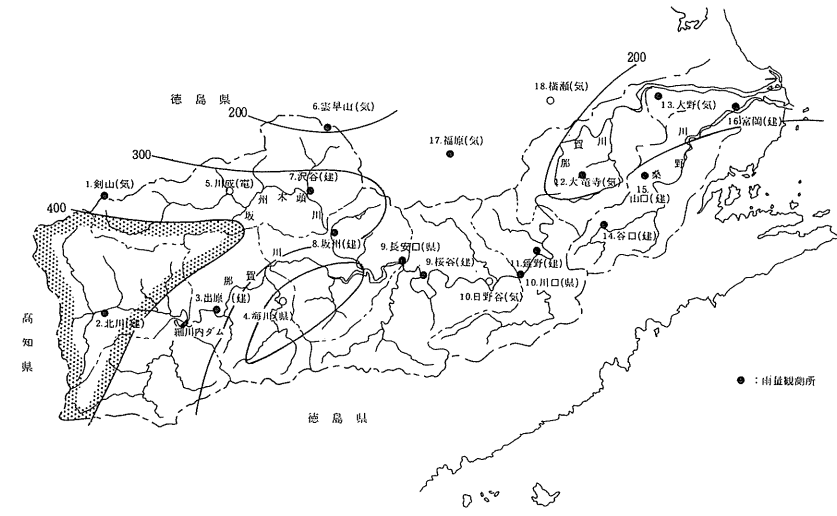
(6) 昭和43年 7月29日洪水 ( $Q_p = 4,942 \text{ m}^3/\text{sec}$ )



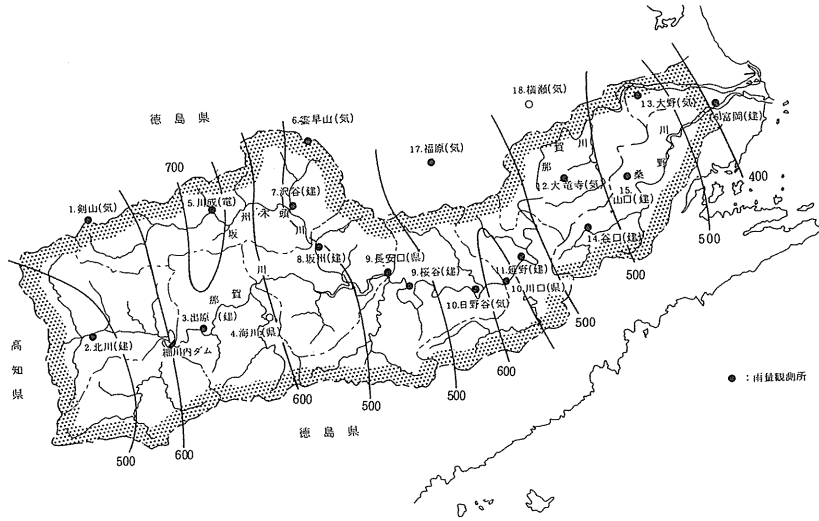
(7) 昭和35年 8月29日洪水 ( $Q_p = 4,735 \text{ m}^3/\text{sec}$ )



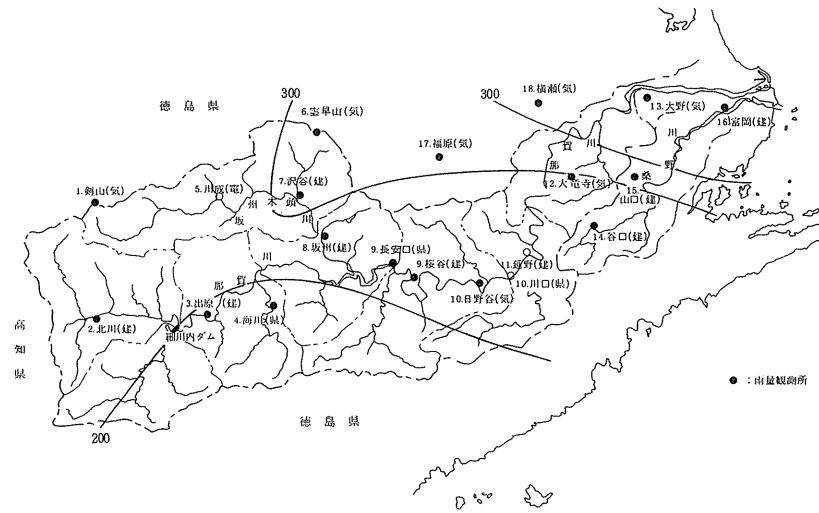
(8) 昭和42年 7月10日洪水 ( $Q_p = 4,273 \text{ m}^3/\text{sec}$ )



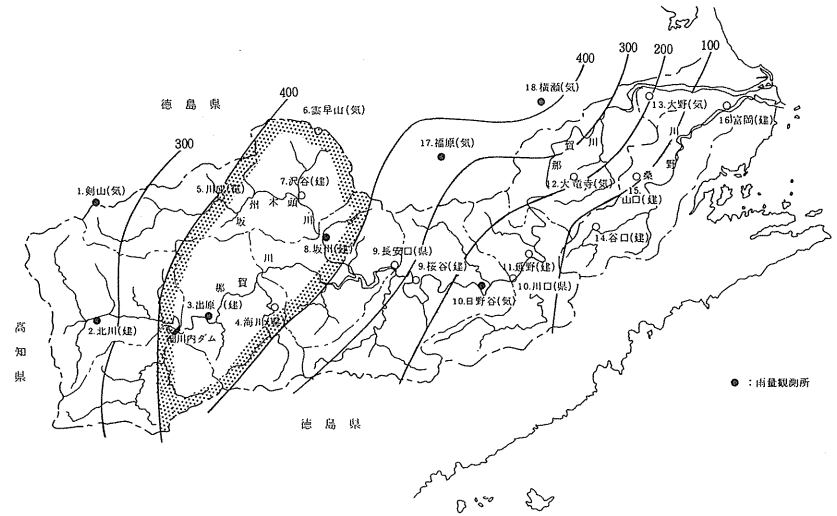
(9) 昭和40年 9月14日洪水 ( $Q_p = 3,622 \text{ m}^3/\text{sec}$ )



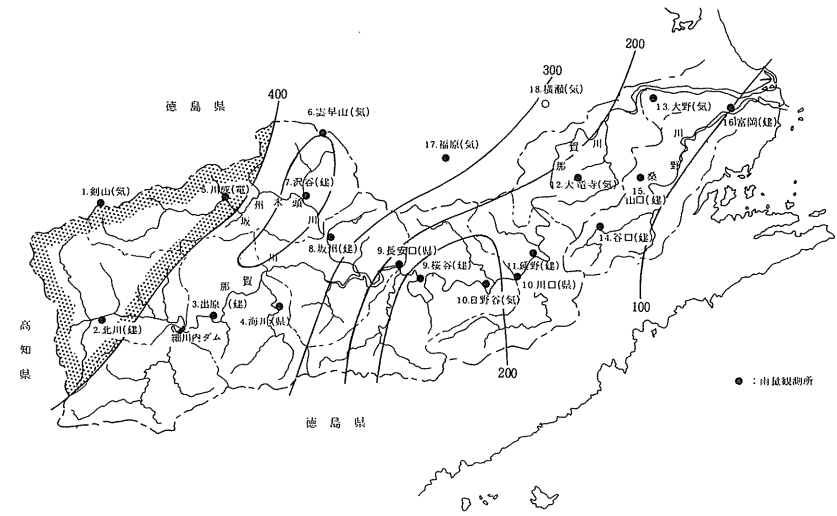
(10) 昭和34年 9月26日洪水 ( $Q_p = 3,464 \text{ m}^3/\text{sec}$ )



(11) 昭和24年 8月18日洪水 ( $Q_p = 3,440 \text{ m}^3/\text{sec}$ )



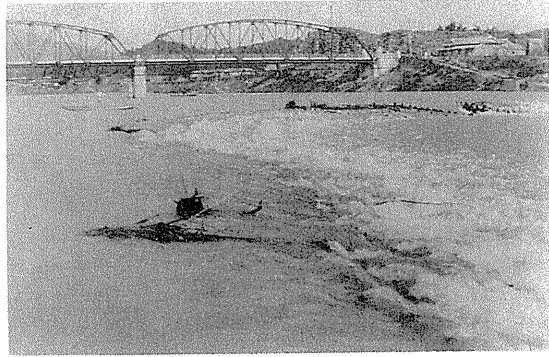
(12) 昭和39年 9月25日洪水 ( $Q_p = 3,438 \text{ m}^3/\text{sec}$ )



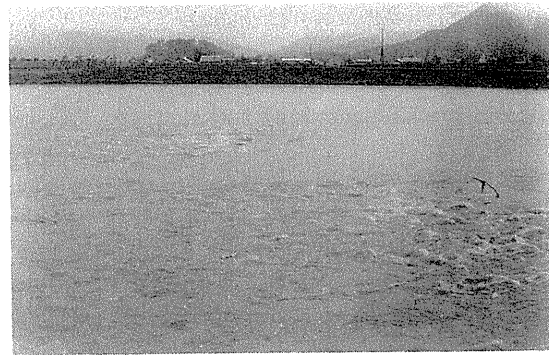




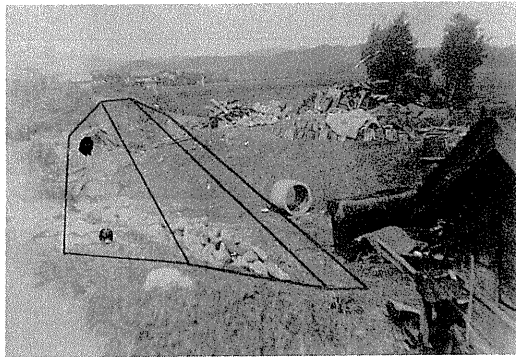




那賀川橋（洪水最盛期には水位が桁下1.8mに達す）



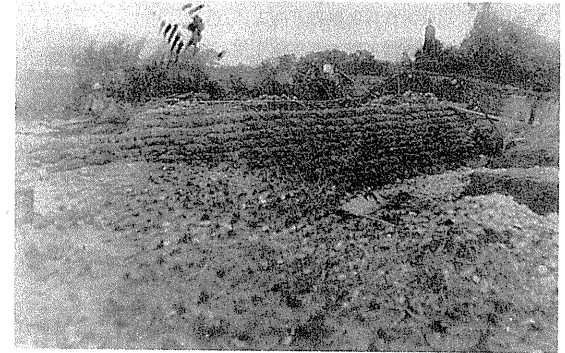
中野島 南島付近



柳島  
用水堤防決潰



柳島



柳島 岡川左岸堤防応急施工



中原 那賀川右岸堤防応急施工



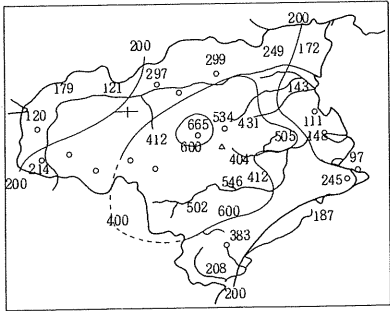
昭和16年8月15日 (台風14号)

8月3日ヤルト南東海上で発生した台風14号は、9日にマリアナ諸島、13日には南大東島南東海上に達し、その後北上をつづけ、15日6時には室戸の西に上陸し、9時頃に多度津付近から中国を経て日本海に抜けた。室戸で960mbと最低の気圧を示したが、その後勢力を弱めながら日本海に抜け、17日に北海道南方海上で消滅した。

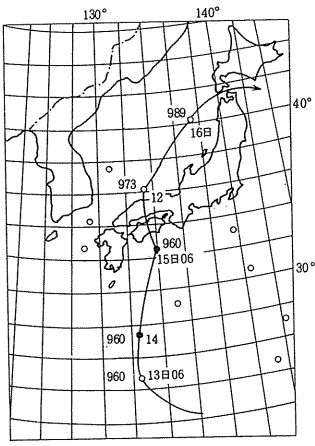
台風の通路で相当な暴風雨となり、徳島で風速SE 37.8m/secを測定したが、これは過去70年間で最も強いものとなっている。

台風前ぶれの雨は12日から始まり、剣山の南北斜面で200mm以上に達したが、一般には100mm以下であり、13日も100mm内外と少なかったが、14日から台風通過の15日朝までに大降りして山地で400mmを越すところ(桜谷423mm)も出たが、下分上山で398mm、横瀬367mm、坂州341mmとなった。このため、明見では大洪水の6,860m<sup>3</sup>/secを記録している。

被害は豪雨が短時間であったため、支流や局地河川が氾濫した。特に那賀川では桑野川、岡川が氾濫し、一面の海と化した。また富岡水門が着手したばかりであったため仮設の足場や機械が流失した。



8.12~14 3日合計雨量



台風経路

総降雨通	剣山(俵)	- (mm)	坂州(俵)	562	山口(俵)	-				
	北川(俵)	788	延野(俵)	-	富岡(俵)	221				
	木頭(俵)	521								
洪水	基準地点 明見 6,860m <sup>3</sup> /sec (実績水位) (警戒水位 - )									
被害	被害別	死者 行方不明	家屋 全壊	家屋 半壊	家屋 流失	床上 浸水	床下 浸水	浸水田	浸水畑	その他
	全国	55	948	353	21	687	14,312			
	徳島県下	3	114	50	10	319	4,721			
	那賀川									

昭和16年8月15日洪水 浸水状況



桑野川 新町橋付近



岡川 富岡橋付近 富岡橋より下流を望む











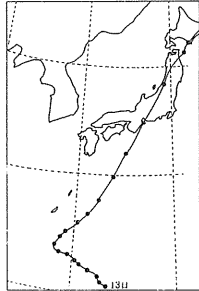




昭和40年9月14日（台風24号）

台風又は前線の経過

台風23号の通過に引き続き、マリアナ群島西部に発生した熱帯性低気圧は、中心気圧995mbを示し、9月11日9時には沖の鳥島の南東約550kmの海上で台風24号となった。台風はその後次第に発達しながら毎時20kmで北西へ進み、14日15時には南大東島の南方約350kmの海上に達し、中心気圧950mb、最大風速55m/sec、半径200km以内では25m/sec以上の暴

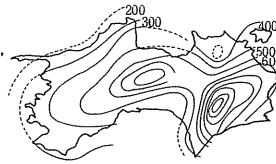


台風第24号 進路図

風圏を伴った。台風は、その後北に向きを変え16日0時には北東に転じ次第に加速し、16日15時には南大東島の西方海上100kmに達し、中心気圧930mb、最大風速60m/secと強い大型台風に発達して、北東へ毎時25kmで進み、室戸岬の南330kmを通過し、17日21時志摩半島に上陸、ついで渥美半島へ再上陸した。

那賀川の降水状況は、台風24号が、四国の上空に長時間停滞する頑強な前線を刺激したことにより豪雨をもたらした。雨は、14日の12~13時に出原31mm、坂州41mm、長安口13mm、宮浜40mm、谷口64mm、山口50mmと下流へ寄るに従って多く降り、14日の22時から16日の1時がピークとなり、次第に小雨となって15日の14~16時頃一時降り止んだ。しかし再び降

り始め、16日11~15時の間に各所で時間雨量のピークを記録し、また一時小雨となった。さらに、台風が四国に近づいた17日9~12時に3回目の雨のピークを迎え、通過とともに次第に小雨となっていた。



台風24号四国地方総雨量分布図  
昭和40年9月10日9時~11日9時

このため古庄では14日14時に、指定水位4.00mを突破し18時30分に5.80mを記録して下降し、つづいて15日12時5.69m、16日22時5.62mとピークがあり、3度にわたり警戒水位を越え、17日17時に4.55mを記録したのを最後に下降した。

また、桑野川の大原では、集中豪雨に見舞われ、14日19時警戒水位3.60mを大中に越える6.35mを記録し、15日9時に3.88m、16日24時に4.24mと警戒水位を越えるピークを記録し、17日15時3.28mを最後に下降した。

被害状況は、台風23号による洪水の直後に発生した豪雨であったため、破損の修理も完全に行われていなかったため、被害は非常に大きなものとなった。被害は、堤防漏水及び河床洗掘低下による低水護岸の崩壊流失、波浪による堤防法面の崩壊等であり、早急に復旧工事を加える個所が多くてた。

総降雨量	剣山(観)	1,016(mm)	坂州(観)	880	山口(観)	820		
	北川(観)	843	延野(観)	525	富岡(観)	547		
	木頭(観)	1,347						

洪水	基準地点 古庄 3.622m/sec 実績水位 5.80 (警戒水位 5.50)							
----	--	--	--	--	--	--	--	--

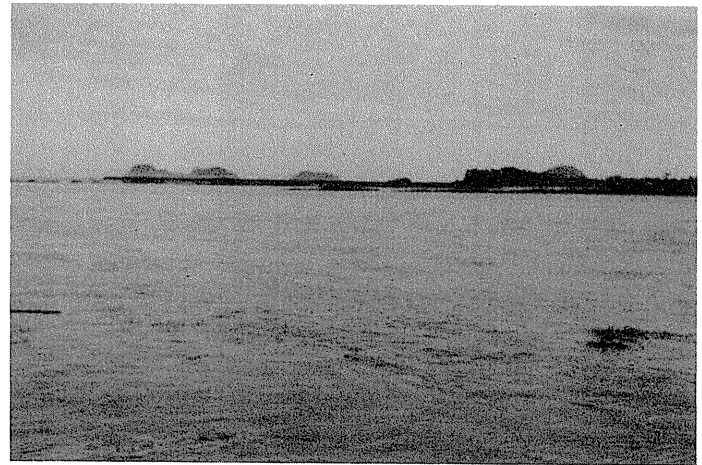
被害	被害別	死者 行方不明	家全 全壊	家半 全壊	家流 流失	床浸 上水	床浸 下水	浸水田	浸水畑	その他
	全国	107	409	662	258	43,082	208,738	71,453	8,332	
	徳島県下		45			2,608	24,922	12,615		23、24号によるもの

	那賀川		0			659	2,300	1,499		23、24号によるもの
--	-----	--	---	--	--	-----	-------	-------	--	-------------

昭和40年9月14日洪水 浸水状況



大京原付近



中島地先より辰巳地区を望む



昭和43年7月29日 (台風4号)

台風又は前線の経過

7月19日マリアナ東方海上に発生した弱い熱帯低気圧は、ゆっくりと西へ移動しながらしだいに発達して、21日9時サイパン島の北東約150kmの海上に達し、中心気圧994mb、中心付近の最大風速18m/secの台風4号となった。その後台風は北西進しながらさらに発達して、24日21時硫黄島の南西海上約350kmの海上に達した頃には、中心気圧925mb、中心付近の最大風速55m/sec、暴風半径250kmという超大型の台風となった。

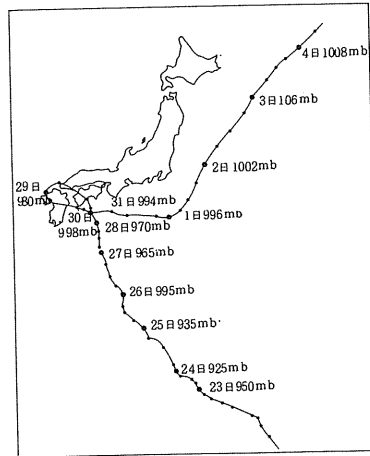
台風はその後北西進を続け、25日硫黄島の南西海上を通り、26日9時には南大東島の東海上約550kmに達した。その後引き続き北北西に進み、27日15時北緯30度線を通過、28日9時室戸岬の南々東約180kmの海上に達した。台風は、28日15時室戸岬の南80kmの海上に達した頃から加速しはじめ、19時30分に高知県須崎市付近に上陸した。上陸時の台風の勢力は、中心気圧975mb、中心付近の最大風速25m/secであった。台風はその後やや衰えながら、21時には松山市の南20km付近を通過して伊予灘に抜けた。

雨は27日17時頃から降り始め、台風の接近とともに次第は激しくなり、最も強く降り出したのは28日15時頃で、その後台風の通過に伴って雨も次第に弱くなり、29日6時頃小やみとなった。総雨量は四国山岳部で300~600mm、瀬戸内側では50~100mm、太平洋側で100~200mmとなった。

一方水位は、長安口堰堤の放流に伴って急激

に上昇を続け、28日22時に指定水位4.00mを越え、23時には警戒水位5.50mを突破した。そして29日1時には最高水位6.19m、洪水量4.942m<sup>3</sup>/secを記録した。

被害は、洪水そのものがあまり大きいものでなかったため少なく、老朽化していた根固が、羽ノ浦町明見で140m、吉井町で350m流失したにとどまった。



台風4号 進路図

総降雨量	剣山(気)	753mm	坂州(気)	643	山口(健)	362	
	北川(健)	(欠測)	延野(健)	583	富岡(健)	204	
	木頭(気)	655					

洪水	基準地点 古庄 4.942m <sup>3</sup> /sec		実績水位 6.19							
			(警戒水位 5.50)							
被害	被害別	死者 行方不明	家全 屋壊	家半 屋壊	家流 屋失	床浸 上水	床浸 下水	浸水田	浸水畑	その他
	全国	8	3	2	1	330	9,028	2,716	115	高潮(愛媛、岡山) 高波(大分)
	徳島県下		0			63	1,620	2,991		
	那賀川		0			10	117	908		

昭和45年8月21日 (台風10号)

台風又は前線の経過

8月15日マリアナ諸島付近に発生した台風10号は、発達しながらしばらくは西進し、17日から進路を北西から北北西に変え、20日6時潮岬の南南東約800kmの海上に達した。その頃の台風の勢力は、中心気圧910mb、中心付近の最大風速55m/sec、と非常に強い大型の台風となった。

台風はその後、中心気圧は衰えたものの依然として強い勢力を維持したまま北北西に進んで四国に接近し、21日3時室戸岬の南南西約210kmの海上に達し、四国の太平洋側を暴風雨圏内に巻き込みながら、21日8時すぎ遂に高知県西部の佐賀町付近に上陸した。上陸時の中心気圧は960mb、中心付近の最大風速45m/sec、暴風半径150km、強風半径300kmであった。

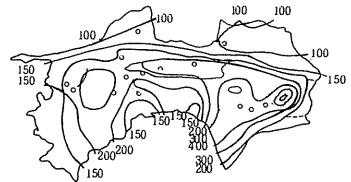
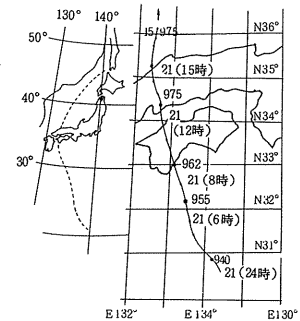
その後四国西部を横断、松山付近を通り11時には安芸灘に出て呉市の東に再上陸、中国地方の中部を横断して日本海を北から北北東に進んで遠ざかった。

雨は、20日0時頃から太平洋側の南東斜面で降りをはじめ、四国地方が暴風雨圏に入った3時頃からさらに強くなり雨の区域も全般に及び、6時~12時にピークとなった。総雨量は四国山岳部で300~600mm、瀬戸内側では70~150mm、太平洋側で100~200mmとなった。

一方水位は下流古庄において21日11時すぎ指定水位4.00mを越え、12時すぎには警戒水位5.50mを突破した。そして16時川口ダムの

放流量が4,600m<sup>3</sup>/secとピークを迎えた2時間後の18時30分には古庄で最高水位6.56m、洪水量5,732m<sup>3</sup>/secを記録した。

被害は、上流域に短時間で多量の降雨があったため、各地で山くずれ、崖くずれ等が相次ぎ那賀川本川も各ダムの放流量増加に伴い、各観測所とも警戒水位を突破し、堤防漏水、高水敷浸蝕崩落、護岸及び根固の洗掘崩落等所々に被害を生じた。



等雨量線図 台風10号(昭和45年8月21日~22日)

総降雨量	剣山(気)	378mm	坂州(気)	473	山口(健)	194	
	北川(健)	386	延野(健)	(欠測)	富岡(健)	104	
	木頭(気)	527					

洪水	基準地点 古庄 5.732m <sup>3</sup> /sec		実績水位 6.56							
			(警戒水位 5.50)							
被害	被害別	死者 行方不明	家全 屋壊	家半 屋壊	家流 屋失	床浸 上水	床浸 下水	浸水田	浸水畑	その他
	全国	27	1,074	4,212	48	29,233	30,728	11,805	1,272	高潮、塩害、高波、 風浪、たつまき
	徳島県下				73	1,075	12,045	7,165		
那賀川			0	0	0	2	21			

昭和46年8月30日（台風23号）

8月20日南鳥島の南海上に発生した弱い熱帯低気圧は、21日9時、南鳥島の南西約50kmの海上で台風23号となった。その後、日本の南海上をゆっくりした速度で西北西に進み、22日には強い太平洋高気圧の南辺を西進しゆっくり発達を続け、28日9時鹿児島県の南南東約450kmの海上に達し、急速に発達しながら北西に進んだ。29日6時には鹿児島県の南方約250kmの海上に達し、この頃からゆっくりと北上し、九州に接近するにしたがって急速に発達、29日23時30分鹿児島県大隅半島の佐多岬付近に上陸した。29日18時の台風の中心気圧は915mb、中心付近の最大風速は50m/sec、風速25m/sec以上の暴風半径は300km、風速15m/sec以上の強風半径は500kmで、この頃が台風の最盛期であった。

台風はその後九州の南東部を衰えながら北北東に進み、30日9時すぎ日向灘に抜けて東北東進し、16時頃足摺岬付近を通過して20時頃高知県南国市付近に再上陸したのち、四国地方を北東進して31日0時には香川県東部の海上へ抜けた。

台風が九州南方にあった28日朝から四国南西部で東風が強まり、28日晚から四国西部山岳部で強雨が降った。29日晚には四国西部全般で雨勢が強まり、30日に入って四国東部山岳部でも強雨が降り始め、強雨はしだいに四国全域に及んだが、30日晚から四国西部の

強雨はしだいにやみ、台風の通過にともなって30日夜半前には強雨の中心が四国北東部に移った。総雨量は瀬戸内側で100～300mm、太平洋側で200～300mm、東部山岳部で300～600mm、西部山岳部で300～800mmとなっている。

この降雨の特性は、台風のみのものであったため、各地で短時間に大雨をもたらした。特に中流部右支川古屋谷川流域及び福原を中心に中流部に雨が集中したため、那賀川の過去の降雨パターンとは異なったものとなっている。

このように雨量が多く、強雨が長く続いたのでダムの放水もあり古庄においては30日16時には指定水位4.00mを、18時には警戒水位5.50mを突破し、3時間後の21時には最高水位7.94mと、HWLにあと50cmにせまる洪水量7,305m<sup>3</sup>/secを記録した。

被害は、台風23号が、速度がゆっくりでしかも迂回コースをとり、降雨が長期にわたったため甚大なものとなった。流域内の各所で山くずれ、崖くずれが相次ぎ、河道も堤防漏水、高水敷浸蝕崩落、護岸及び根固めの洗掘崩落の被害が発生した。さらに、下流鷺敷町和食、阿南市加茂町、熊谷地区等の無堤地区では多大の家屋が浸水した。

総降雨量	剣山(気)	398(mm)	坂州(気)	528	山口(健)	359				
	北川(健)	615	延野(健)	326	富岡(健)	111				
	木頭(気)	633								
洪水	基準地点古庄 7,305m <sup>3</sup> /sec 実績水位 7.94 (警戒水位 5.50)									
被害	被害別	死者 行方不明	家全 全壊	家半 半壊	家流 流失	床浸 上水	床浸 下水	浸水田	浸水畑	その他
	全国	44	88	182	14	13,948	108,342	35,315	9,971	
	徳島県下				4	329	2,983	1,934		
那賀川				1	196	372	771			

昭和49年9月9日（台風18号）

9月2日台湾の東海上に発生した弱い熱帯低気圧は東進しながら発達し、5日3時南大東島付近で台風18号となった。台風はその後進路を西北西にとり、発達しながらゆっくりした速度で進み7日9時には奄美大島の西方海上に達した。この頃がこの台風の最盛期であったが、中心気圧975mb、最大風速35m/secと小型で並の台風であった。

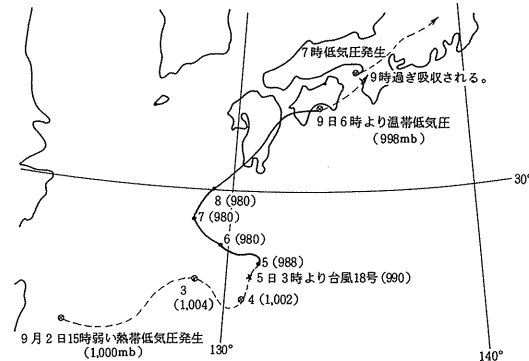
その後台風は、加速しながら九州南海上を北東に進み、20時10分頃鹿児島県枕崎付近に上陸した。上陸時の勢力は中心気圧980mb、最大風速20m/secであったが、上陸後しだいに衰えはじめ、宮崎県を縦断して豊後水道に抜け、9日4時頃四国西部に再上陸したのち四国中部に進み、温帯低気圧となって9日8時頃紀伊水道に抜けた。

雨は台風の接近に伴い7日夜半より連続的に降り始めた。その後台風が鹿児島県の西部に上陸したと思われる8日21時頃よりしだいに激しくなり、台風が四国西部に上陸した9日4時頃に最も強い雨となった。その後台風が温帯低気圧となり、9日9時頃まで小雨が連続的に降り続き10時頃止んだ。

この降雨の特性は台風による雨のみであったが降水量は流域全体的に多く250～400mmであった。

本川流域は8日20時から9日8時までの間、時間雨量20～90mmの強雨にみまわれたため、古庄においては9日4時すぎに指定水位に達し、9日8時すぎに警戒水位5.50mを突破したがあまり上昇はみられず、10時5.70mをピークに下降に向った。

台風又は前線の経過



総降雨量	剣山(気)	234(mm)	坂州(気)		山口(健)	302				
	北川(健)	338	延野(健)	346	富岡(健)	306				
	木頭(気)	388								
洪水	基準地点古庄 3,927m <sup>3</sup> /sec 実績水位 5.70 (警戒水位 5.50)									
被害	被害別	死者 行方不明	家全 全壊	家半 半壊	家流 流失	床浸 上水	床浸 下水	浸水田	浸水畑	その他
	全国				9	863	7,471	3,218		
	徳島県下							212		
那賀川		0	0	0	0	38				

昭和50年8月23日(台風6号)

台風又は前線の経過

南大東島西方海上の熱帯低気圧は、発達して19日9時には中心気圧994mb、中心付近の最大風速20m/secの台風6号となった。その後ゆっくりと北西進し、沖縄付近でUターンするという夏型台風の特徴を示し、21日には再び南大東島付近から西日本をめざして北東進を始めた。一時西日本上の太平洋高気圧に進路を阻まれたが順調に北東～北北東に進み22日の朝からは速度をはやめて四国東部から近畿方面に向った。発生時には小型の弱い豆台風であったが、四国沿岸に近づいた22日21時には中心気圧965mb、最大風速40m/secと、大型で並の勢力に発達した。

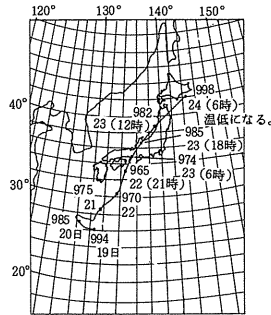
台風6号は23日1時半頃965mbの勢力を保ったまま徳島県の蒲生田岬をかすめ、徳島県東岸、淡路島沿いに進み同5時半頃神戸市南西海岸に上陸、勢力を徐々に弱めながら北陸から東北地方を斜断、23日23時には太平洋に抜けた。

雨は21日朝方より降り始め、その後台風が四国に接近した22日早朝より大雨となり、台風が徳島県を通過した23日4時頃まで激しく降り続いた。このため那賀川上流域では22日7時頃より23日4時頃まで20～80mmの豪雨が連続し、総雨量が600～850mmに達した。

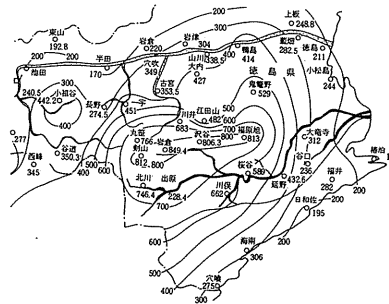
このため下流古庄において22日10時に指定水位4.00mを越え、その後徐々に上昇して20時には警戒水位5.50mを突破した。そして23

日4時には最高水位7.38m、洪水量7.213m<sup>3</sup>/secを記録した。

この台風による被害の他、河川の増水による護岸、根固の流失及び河床洗掘等の被害が発生した。



台風第6号進路図



台風6号雨量分布図(8月21日～22日)

総降雨量	剣山(気)	812(mm)	坂州(観)	山口(観)	504
	北川(観)	1,274	延野(観)	富岡(観)	330
	木頭(気)	617			

洪水	基準地点 古庄 7.213m <sup>3</sup> /sec		実績水位 7.38	
			(警戒水位 5.50)	

被害	被害別	死者 行方不明	家全 屋壊	家半 屋壊	家流 失	床上 水	床下 水	浸水田	浸水畑	その他
	全国									
	徳島県下			125	81	1,982	11,812	6,120		
	那賀川		0	1	0	91	80	391		

昭和51年9月11日(台風17号)

台風又は前線の経過

9月3日21時に、カロリン群島東部海上で発生した弱い熱帯低気圧は、4日15時発達して台風17号となった。台風17号は、その後次第に発達しながら北西に進み、沖縄の東南東約150kmの海上で進路を北に変え、速度を落しながら北上した。そして

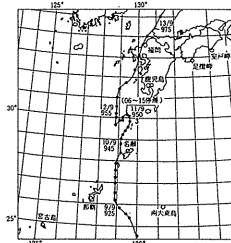
臥蛇島付近で10日夜から12日午前にかけて約30時間停滞した。台風は停滞しながら、中心気圧950～955mbの大型で強い

勢力を保っていたが、この停滞が、中国四国地方に長時間にわたり大雨を降らせた。

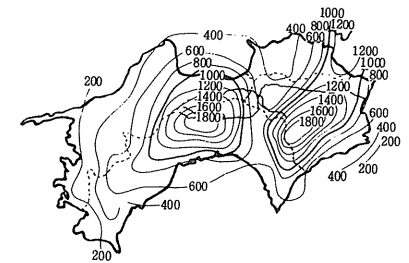
台風は、太平洋高気圧が後退しはじめた12日午後になって北上をはじめ、九州西方を北北東に進んで13日午前1時40分長崎付近に上陸、九州を横断して5時頃に玄界灘にぬけ、日本海を北東に進んで14日朝、温帯低気圧となって消滅した。

那賀川における降水状況は、8日から13日の長期間にわたって降りつき、降雨量が日早で2,772mm、坂州で1,535mmに及ぶ豪雨となった。これは、台風が長期にわたって停滞し

たことによる。出水も、洪水継続時間が記録的な長期にわたるものであった。台風が本邦に接近し始めた8日朝方より13日昼過ぎまで継続的な大雨のため、古庄で12日14時水位が5.95mとあまり高くならなかったが、前後5回にわたって警戒水位を突破すること通算45時間を数えた。ピーク流量は4,510m<sup>3</sup>/secと中程度の洪水となった。



台風17号進路図



台風17号雨量分布図(9月8日～13日)

総降雨量	剣山(気)	1,839(mm)	坂州(観)	1,535	山口(観)	628
	北川(観)	2,055	延野(観)	828	富岡(観)	471
	木頭(気)	1,868				

洪水	基準地点 古庄 4,510m <sup>3</sup> /sec		実績水位 5.95	
			(警戒水位 5.00)	

被害	被害別	死者 行方不明	家全 屋壊	家半 屋壊	家流 失	床上 水	床下 水	浸水田	浸水畑	その他
	全国									
	徳島県下	10	155	115		3,914	24,280	2,218	2,000	
	那賀川		0	0	0	7	19	216.2		

4. 那賀川改修史年表

～1281

年号(西暦)	政治・経済(国, 県)	那賀川関係	その他(市町村他)
約3000年前 B.C. 100			阿南市福井遺跡 県下各地弥生遺跡, 銅鐸遺跡
A.D. 500			中期古墳がつくられる勝浦の御県(みあがた)・春日部の屯倉(みやけ)が定められた
538	県内は粟の国, 長の国などとなる。		
大化2年(646)	大化改新, 粟, 長の2国合して阿波国をおく		
天平年間(729)			思山寺, 立江寺, 地藏寺等勅願により行基開創
寛平8年(896)			名方郡と名東, 名西の三郡とする
延喜1年(901)			宝田, 中野島, 見能林, 羽ノ浦, 立江, 川東の水田は殆んど海底
承安5年(935)	紀實之阿波東岸を航して京都に戻る		
天慶3年(940)	天慶の乱 藤原純友阿波侵入		
寛仁1年(1017)			那賀川榑瀨荘石清水八幡社領となる
長寛1年(1163)			那賀川長生村の八幡神社 二品家政所下文紀年長生村西方方面は入江……今津村八幡は重要港
文治1年(1185)	源義経尼子浦に上陸し国府をへて讃岐屋島に向う		那賀郡福井村椿地弥勒像紀年
貞応1年(1222)			秋本三郎兵衛尉榑瀨荘地頭となる
2年(1223)	土御門上皇阿波に遷幸		
弘長1年(1261)			勝浦郡勝浦町星谷大宮八幡造宮
弘安1年(1278)			名西郡鴨島町下浦矢負橋板碑紀年
弘安4年(1281)		那賀川は自然氾濫時代 下流は殆んどデルタ地帯	



1289 ~ 1637

年 号 (西 曆)	政治・経済 (国, 県)	那 賀 川 関 係	その他 (市町村他)
正応2年(1289)			海部郡海南町城満寺建つ
建武2年(1335) 3年(1336)	細川和氏阿波守となる 細川頼春四国管領となる		
天平16年(1361)			大地震, 津波, 東由岐陥没, お亀磯陥没
至徳1年(1385)	細川頼之徳島を渭津と命名		
明德2年(1391)	細川頼元管領となる		
応永7年(1400)		那賀川の流路がしばらく 定まる 低湿地は草生地又は水田 になっていく	
14年(1407) 20年(1413) 21年(1414)			海部郡穴喰深供養碑記念 阿南市相生町桂国寺建立 那賀郡木頭長福寺金鼓
応仁1年(1467)	応仁の乱はじまる		
文明9年(1477)	応仁の乱終わる		
永正9年(1512)		海部郡沿岸津波	
天文3年(1534)	細川持隆 足利義延を阿波 に迎え平島に奉ずる		
19年(1550)			辰己を除く他の土地は大部分 現在のものに近い形態を ととのえてきた
元禄・天正 (1558~1591)	細川氏の家臣新開遠江守道 善が支配, その後賀島氏		
天正1年(1573)			名東郡より以西部を割き那 賀郡を那東・那西の2郡に 分ける
3年(1575) 13年(1585)	長宗我部元親海部郡に侵入 元親の四国統一がなる 7. 元親が秀吉に降伏する		豊臣秀吉四国を征し戦功に より蜂須賀正勝の子家政阿 波を征す
17年(1589)	検地をおこなう(徳島)		
慶長2年(1597)			富岡の人 三木パウロ長崎 で殉教
8年(1603)			検地帳 大野一の堰より灌 水の記録あり
9年(1604) 10年(1606) 19年(1614)			大地震 海部郡津波 阿波藩御林制度定書出る
元和1年(1615) 4年(1618)	大阪夏の陣 藩法23ヶ条御壁書の制定		を徳島と改める
寛永4年(1627) 13年(1636) 14年(1637)			3. 牛輪, 入野, 延野用水通水 那賀郡答島塩田を開く 海部郡四方原開拓はじまる

1645 ~ 1854

年 号 (西 曆)	政治・経済 (国, 県)	那 賀 川 関 係	その他 (市町村他)
天保2年(1645)		那賀川広瀬堰を設ける	
延宝5年(1677)			那賀郡平野塩田開く 飢饉
天和2年(1682)			
元禄1年(1688)		那賀川の高瀬舟始まる	
宝永2年(1705) 4年(1707)			折宇春の久谷溜池なる 大地震 津波
元文元年(1736)			大ききんにてわら, むしろ まで食う 大凶作
元文5年(1740)			たてわ谷用水完成
寛延2年(1749)			風雨にて大凶作 御林道林はじまる 凶作の ため御林開墾願出
宝暦7年(1757) 8年(1758)			
明和8年(1771)		大洪水	
安永4年(1775)		大洪水	大地震
天明6年(1786) 7年(1787)		9. 大洪水 大洪水 家屋人畜の流亡 悲惨であった	
8年(1788)			羽ノ浦町古毛の万代堤竣工
寛永元年(1789)			大地震
享和1年(1801)			海部町浅川村の農民, 牟岐 浦の農民 土佐へ逃散
文化1年(1804) 2年(1805)	平島公方足利義根阿波を去 る 伊能忠敬が阿波沿岸を測量		風雨出水
5年(1808) 7年(1810)			海部郡海部町の芝用水なる
文政2年(1819) 12年(1829)			那賀郡仁宇谷一揆 黒船一隻日和佐沖に現る。
天保1年(1830) 2年(1832)		那賀川霞堤完成	
6年(1835)			大かんばんつにて金比羅へ貰 い水に行く
7年(1836) 9年(1837)		大出水 広瀬堤大出水に て姿を止どめず	大凶作 大飢饉
弘化元年(1844)		那賀川堤防保護工事を起 し, 片棒工が採用 出水 水剝岩を築造	
2年(1845) 4年(1847)			大風雨
安政元年(1854)			大地震 (木頭) 村内各所 水筋くるう 海部沿岸大津 波

年 号 (西 曆)	政治・経済 (国, 県)	那 賀 川 関 係	その他 (市町村他)
安政6年(1859)		大洪水	
万延元年(1860)			4. 11日大水あり
慶応2年(1866)		2. 大洪水, 那賀川下流富岡の土手切れる	
3年(1867)	大政奉還		
明治元年(1868)	治河使を設置		1. 「ええじゃないか」騒ぎ
2年(1869)		藩籍奉還, 徳島藩となる「ガマン堰」開始	
3年(1870)	5. 西京, 東京, 大阪の3出張土木局設置		各村の戸籍簿作製される
4年(1871)	9. 庶民に苗字の公称が許される		
5. 貨幣単位, 両から円に改まる			
7. 断髮, 廢刀令出る			
7. 徳島県をおき11月15日名東県と改称			
6年(1873)	7. 廢藩置県令が発せられ高知県となる		3. 吉井用水開墾着手
7年(1874)	8. 初めて県会が開かれる		
8年(1875)	9. 治水の行政制度確立		
9. 名東県から分離し香川県となる			
8. 阿波国を高知県に編入する			
8. 香川県を廃し愛媛県に合併する			
8. 阿波を高知県に, 淡路を兵庫県に合併			
9. 徳島藩会社設立			
9. 高知県徳島支庁を徳島に置く			
11年(1878)	7. 郡区長村編成法, 府県会規則, 地方税規則公布		
12年(1879)	1. 郡区長村編成法施行		
13年(1880)	3. 徳島県を再置	大洪水	寺の内用水完成, ふり馬鍬はじめて入る 稀有の大飢饉, 南宇森の下の溜池完成
17年(1884)			6. 吉野川大出水
18年(1885)			7. 台風渡川大出水
21年(1888)	4. 市制, 町村制公布		
22年(1889)	2. 大日本帝国憲法発布		10. 坂州木頭村, 沢谷村が誕生する, 加茂谷村誕生チブス大流行
10. 市制, 町村制施行			10. 奥木頭村, 上木頭村と村名改称
23年(1890)	7. 第1回総選挙		大飢饉

年 号 (西 曆)	政治・経済 (国, 県)	那 賀 川 関 係	その他 (市町村他)
明治24年(1891)	4. 自治制度として郡制施行		徳島測候所開設
9. " 県制施行			
25年(1892)		7. 高磯山大崩壊那賀川大洪水 木頭坂州の両部落で被害出る	
		11. 那賀川の浸淫について陳情 大かんばん	南久保溜池出来る 徳島電灯会社送電開始
27年(1894)	8. 日清戦争		
28年(1895)			
29年(1896)	4. 「河川法」公布		
30年(1897)	3. 「砂防法」公布		
32年(1899)	2. 徳島鴨島間汽船開通 県が本川の改修着手(間もなく中止)	6. 大洪水	3. 相生村伝染病院設立 富岡中学校設立
33年(1900)			
34年(1901)	県道小松島, 鶯敷, 日和佐線着工		11. 延野役場消失 木頭街道改修始まる
37年(1904)	2. 日露戦争		那賀川運材業組合設立
39年(1906)			4. 徳島羽ノ浦間馬車運行開始
41年(1908)			徳島水力電気KK設立
43年(1910)	10. 臨時治水調査会設置, 第一次治水計画		
44年(1911)		徳島県知事桜谷堰堤設置許可	
45年(1912)	5. 吉野川改修工事起工	1. 桜谷堰堤工事完成	郡立富岡高等女学校開校
2年(1913)		9. 大台風	大水害
大正元年(1912)			4. 徳島小松島間汽船開通
4年(1914)		5. 徳島水力電気株式会社と沢谷村, 坂州木頭村外関係村との間に桜谷堰堤に関する契約書が手交される 台風で水稲被害	3. 相生村産業組合設立 6. 日野谷村産業組合設立 沢谷村でチブス大流行
5年(1915)		9. かんばつ, 台風により農作物に被害出る	3. 阿南鉄道(中田駅-古庄駅)開通羽ノ浦, 徳島間の馬車運送営業廃止 沢谷村で赤痢流行 日野谷鉾山始まる
6年(1917)			
7年(1918)	8. 徳島県下各地に米騒動勃発	8. 大洪水	
8年(1919)		9. 大洪水	2. 羽ノ浦村に町制を施行し羽ノ浦町と改称 流路の開削を実施
10年(1921)	臨時治水調査会再設置, 第二次治水計画		
12年(1923)		8. 河川法第1条の適用をうけ重要河川であることが法的に認められた	3. 延野, 日野谷村に初めて電話架設 大かんばん, 相生郵便局開局 木頭山林会発足

那賀川改修史

460 参 考 資 料

那賀川改修史年表 461

1924 ~ 1940

1941 ~ 1949

年 号 (西曆)	政治・経済 (国, 県)	那 賀 川 関 係	その他 (市町村他)
大正13年 (1924)	6. 第1次加藤高明 (護憲3派) 内閣成立		岩脇に小作争議勃発 相生村県行造林造成, 相生 村に電灯ともる
14年 (1925)	4. 農商務省廃止, 農林省, 商 工省を設立 5. 普通選挙法公布 8. 第2次加藤高明憲政会内閣 成立	那賀川改修計画成る	
15年 (1926)	1. 第1次若槻内閣成立 吉野川改修工事成る		木頭森林組合成立 木頭水力利用組合設立 電燈はじめてつく (和無田 校区域)
昭和2年 (1927)	4. 田中義一内閣成立	那賀川橋起工式	森林組合工費2万円を以っ て流路岩石破碎 坂州木頭自家用電気利用組 合設立, 集水堰, 当堰改修
3年 (1928)		10. 那賀川橋開通	4. 川口橋 (吊橋) 開通
4年 (1929)	7. 浜口雄幸内閣成立	4. 那賀川改修事務所創設	3. 沢谷村で県行造林契約 直轄事業着手 { 本川12km 桑野川8km 北川電気利用組合設立, 8 月5日宮浜上流6ヶ村三重 合同電気株式会社と覚書を 交換
5年 (1930)	3. 徳島市役所全焼 4. 徳島県庁新庁舎新築落成		
6年 (1931)	4. 国立公園法公布 4. 若槻内閣成立 9. 満州事変勃発		
7年 (1932)	5. 斎藤実内閣成立	本川右岸横見堤防に着手	
8年 (1933)	土木会議の河川部会設置	平野用水完成	木頭村と村名改称
9年 (1934)	7. 岡田啓介内閣成立	9. 室戸台風による被害出る 河川改修	相生鉾山始まる
10年 (1935)	台風 四国各河川に大洪水 をみる		12. 那賀川野菊発見
11年 (1936)	6. 電力国家管理案発表, 財界 動揺		
12年 (1937)	2. 林銑十郎内閣成立 6. 近衛文麿内閣成立 7. 支那事変始まる		
13年 (1938)	1. 厚生省を設置 3. 国家総動員法成立 3. 電力国家管理法, 日本放送 電会社成立	9. 釜が谷を中心に大洪水お こる	
14年 (1939)	1. 平沼騏一郎内閣成立 8. 渇水と石炭不足で電力きき ん, 全国で電力供給制限実 施 8. 阿部信行内閣成立	11. 那賀川橋継足工事の起工	
15年 (1940)	1. 米内光政協力内閣成立 7. 第2次近衛内閣成立	7. 大かんばん	蟬谷マンガン鉾山掘り初め 助森の元溜池完成

年 号 (西曆)	政治・経済 (国, 県)	那 賀 川 関 係	その他 (市町村他)
昭和16年 (1941)	2. 農地等管理令, 農地価格統 制令実施 7. 第3次近衛内閣成立 10. 東条英機内閣成立 12. 大東亜戦争	5. 富岡水門着工 大水害 8. 水防訓練実施	牟岐線開通, 南宇用水 (拝 の久谷) 着工 6. 県道沢谷, 鷺敷線開通祝賀 式
17年 (1942)	9. 大東亜省の設置決定 7. 那賀地方事務所設立	3. 那賀川橋継足工事完成	坂州木頭村の村名変更, 坂 州村となる
18年 (1943)			岡川締切 (ガマン堰), 北 川, 出原間道路開通
19年 (1944)	7. 小磯国昭, 米内光政協力内 閣成立		12. 東海大地震
20年 (1945)	4. 鈴木貫太郎内閣成立 7. 徳島市空襲 8. 第2次世界大戦終了 8. 大東亜戦争終わる 8. 東久邇宮内閣成立 8. 大東亜省, 軍需省, 農商務省 を廃止, 商工省, 農林省を 設置	9. 枕崎台風	7. 徳島市大空襲にあう
	10. 弊原喜重郎内閣成立 12. 閣議, 戦災地復興計画基本 方針を決定		
21年 (1946)	2. 徳島県庁内に進駐軍々政部 設置 4. 四国四県が四国地方国土復 興促進会設立 8. 経済安定本部令公布 9. 閣議, 公共事業処理要綱を 決定 公共事業の認証制度の採用 11. 日本国憲法公布 12. 全府県に土木部を設置 12. 南海大地震		
22年 (1947)	4. 地方自治法公布 5.3施行 4. 阿部五郎初代公選知事とな る 5. 新憲法実施 5. 新制中学校発足 11. 内務省に治水調査会設置 12. 建設院設置法公布 農地改革が始まる		
23年 (1948)	1. 建設院発足 7. 建設省設置法公布 7.10施行 10. 建設省設置 5. 建設業法公布 5. 通商産業省設置法公布 5. 農林省, 運輸省設置法公布	9. 那賀川河水統制の建議案 を提出可決 8. ジュース台風 那賀川電源開発事業始ま る	10. 農林省富岡支所食料事務所 羽ノ浦出張所開庁  川島用水トンネル完成

1950 ~ 1958

年 号 (西 曆)	政 治 ・ 経 済 ( 国 , 県 )	那 賀 川 関 係	そ の 他 ( 市 町 村 他 )
昭和25年 (1950)	5. 国土総合開発法公布 9. ギジヤ台風	9. ジェーン台風襲来, 下広 瀬堰決壊 長安口ダム着工 10. 追立ダム, 坂州発電所工 事始まる 11. 那賀川総合開発事業起工 式	
26年 (1951)	3. 高知木頭徳島線国道に昇格 4. 建設省河川総合開発事業を 開始 5. 9電力開発, 日本発送電 株と9配電株は解散, 電力 事業再編成完了 6. 土地収用法公布 12. 1 施工 9. 講和条約・日米安保条約調 印 12. 総理大臣 国土総合開発法 に基づく特定地域を指定	10. ルース台風 12. 那賀川中央橋竣工	
27年 (1952)	4. 講和条約・日米安保条約発 効 連合軍総司令部 (GHQ) 廃止 7. 電源開発促進法公布 8. 電源開発調整審議会令公布 施行 9. 電源開発株式会社発足 11. 電気事業連合会発足	5. 追立ダム及び坂州発電所 完成	富岡水門の新設 芥原締切堤防完成
28年 (1953)	10. 閣議, 治山治水基本対策要 綱を決定 町村合併促進法施行	2. 那賀川改修吉井堤防着工 6. 台風2号 9. 台風13号 那賀川筏流しこの年限り で消える 本川の事業区域阿南市加 茂まで4km延長	9. 木頭村森林組合設立, 出原 に土木出張所できる 10. 坂州村全域四国電力に切り 替え点燈する 10. 沢谷村第1期電気工事終了, 各家四国電力より配電
29年 (1954)	7. 防衛庁・陸海空自衛隊発足 8. ガットに正式加入		
30年 (1955)	12. 原子力基本法および原子力 委員会設置法公布	4. 長安口ダム完成	4. 坂州, 沢谷の両村合併によ り木沢村発足する 当日第 1回木沢村議会を開く
31年 (1956)	3. 日本道路公団法施行 6. 電源開発促進法改正公布施 行 6. 工業用水法施行		9. 相生村, 延野村, 日野谷村 三か村合併決議する 9. 相生町発足
32年 (1957)	1. 四国通産局, 丸亀市から高 松市へ移動 3. 特定多目的ダム法公布 6. 自然公園法公布	1. 木沢村電源開発対策委員 会を結成 川島用水揚水ポンプ掘付	三角州斉藤島浚渫
33年 (1958)	3. 道路整備緊急措置法公布 4. 地すべり等防止法公布 4. 工業用水事業法公布 6. 四国地建開設 徳島工事事	3. 川口ダム水没補償正式調 印 広野発電所建設工事 始まる	5. 阿南市発足 大久保部落地滑り 出原, 和無田簡易水道完成

1958 ~ 1962

年 号 (西 曆)	政 治 ・ 経 済 ( 国 , 県 )	那 賀 川 関 係	そ の 他 ( 市 町 村 他 )
昭和33年 (1958)	務所, 那賀川工事事務所 12. 公共用水域水質保全法 工場排水等規制法公布 S 34. 3. 1 施行 2級国道 高知-木頭-徳 島線改修起工式	傍示トンネル開設ポーリ ング調査始まる	
34年 (1959)	地すべり等防止法により防 止区域22ヶ所指定 (徳島)	9. 伊勢湾台風 5. 広野PS完成 (四国電力)	神崎製紙誘致 8. 神崎製紙操業開始
35年 (1960)	3. 治水特別会計法公布施行 特定多目的ダム建設工事特 別会計法を廃止 治水特別会計法に一本化 3. 治山治水緊急措置法公布 4. 那賀道路事務所が置かれる 4. 徳島工事事務所 那賀川出 張所 5. テリ地震による津波あり 10. 政府 国民所得倍増計画発 表 12. 治山治水事業10ヶ年計画 2. 建設コンサルタント協会設 立 4. 世界最初の人工衛生ボスト ーク第1号 9. 第2号室戸台風上陸 農業基本法公布 産業の適正配置構想 11. 低開発地域工業開発促進法 11. 水資源開発促進法公布 水資源開発公団法公布 11. 災害対策基本法公布 11. 宅地造成等規制法公布 11. 水資源開発促進法, 水資源 開発公団法 (法) 促進法は 同日施行 公団法はS 37.2 16施行 11. 災害対策基本法公布 (法) S 37. 7. 10 施行	8. 16号台風襲の上橋流失す る 10. 川口ダム発電所発電開始 5. 広野PS完成 (四国電力) 8. 16号台風襲の上橋流失す る 10. 川口ダム発電所発電開始 2. 国道195号四つ足トンネ ル着工 那賀川, 川口ダム完成 (C20億5千万円, 重力 式, 堤高30m, 堤長92.5 m (徳島県))	7. 相生町と鷺敷町との合併協 議打切る
36年 (1961)			3. 大久保新隧道竣工
37年 (1962)	4. 電気事業審議会発足 4. 四国地方開発審議会に吉野 川総合開発部会を設置 (5 月発足) 5. 水資源開発公団設立 5. 新産都市建設促進法 6. 東海道新幹線 "夢の超特急" 試運転 9. 原始力研究所の国産第1号 原子炉にて「原始の火」と もる 国産航空機YS-11 型機初 飛行	左岸河口高潮堤防着手	

1962～1965

年 号 (西 曆)	政治・経済 (国, 県)	那 賀 川 関 係	そ の 他 (市 町 村 他)
昭和37年 (1962)	10. 「全国総合開発計画」閣議決定		
38年 (1963)	7. 新産都市, 徳島, 東予等13ヶ所, 工業整備特別地区6ヶ所を閣議決定 8. 台風9号により那賀川, 吉野川, 渡川, 仁淀川, 物部川が被災 11. 米通信衛生の日米間テレビ中継成功 ケネディ大統領, テキサス州ダラスで暗殺さる 12. 第3次池田内閣成立 12. 生活環境施設整備緊急措置法公布, 施行		7. 新徳島火力発電所運開
39年 (1964)	1. 新産都市指定 7. 阿波国道工事事務所と徳島工事事務所が統合し徳島工事事務所として発足 7. 工業整備特別地域整備促進法公布施行 7. 河川法 S 40. 4. 1施行 7. 電気事業法公布 S 40. 7. 1 施行 7. 新河川法公布 (S 40. 4. 1 施行) 7. 1級国道2級国道の区別を廃止し, 一般国道とする 10. 国鉄東海道新幹線を開業 10. 第18回オリンピック東京大会開催	5. 国道55号徳島県内で直轄管理 9. 那賀川高潮堤防左岸を概成	11. 勝浦郡勝浦町と那賀郡木沢村を結ぶ県道開通 徳島-上那賀線開通
40年 (1965)	3. 1級河川15水系3751河川指定の政令公布 (4. 1 施行) 4. 河川法施行 新全国総合開発計画 (40～60) 5. 山村振興法公布 7. 新電気事業法施行 8. 第2次治水事業5か年計画 9. 台風23号安芸市上陸, 死者行方不明73名 住家 壊14戸 浸水50,000戸	6. 那賀川北岸用水落成 (灌漑面積2,520ha) 8. 那賀川蔭平発電所小見野々堰堤工事着工 (四国電力) 9. 台風23号, 24号により那賀川, 吉野川, 物部川が被災 直轄被害額84千万円, 24号…死者行方不明107名, 住家浸水250,000戸, 40都道府県に及ぶ 9. 台風24号 桑野川計画高水流量突破 11. 勝浦郡上勝町と那賀郡木沢村を結ぶ県道開通 (徳島県) 12. 国道195号四ツ足トンネル完成	

1966～1970

年 号 (西 曆)	政治・経済 (国, 県)	那 賀 川 関 係	そ の 他 (市 町 村 他)
昭和41年 (1966)	4. 広域利水調査を開始 6. 祝日法改正で「敬老の日」「体育の日」新設 6. 中国文化大革命 12. 「2月11日」を建国記念日と布告	1. 那賀川支川桑野川の一の堰改築工事に着手 4. 那賀川支川桑野川の改修が本格化 12. 那賀川小見野々ダム定礎式 (四国電力) 12. 那賀川橋根地区の締切に着手	
42年 (1967)	2. 第2次佐藤内閣成立 3. 山陽新幹線起工 4. 水資源開発公団が早明浦ダム建設所で開所式を行なう 6. 下水道整備緊急措置法公布 8. 吉野川北岸工業用水道事業取水工事着工 (徳島県) 9. 8～9月にわたり西日本一帯に30年来の干害が発生, 香川, 愛媛両県の被害甚大 吉田茂首相没89歳	6. 那賀川, 肱川, 物部川が1級水系になる (S 42. 5. 25 指定)	1. 追立ダム, 黒瀧寺周辺が中部山系県立自然公園に指定される 山村振興法の指定を受ける
43年 (1968)	2. 住友, 別子銅山東平坑270年の幕を閉じ閉山式 2. 電発吉野川建設所開設 2. 徳島県総合開発基本計画 3. 尾道大橋完成 (橋長386.45m) (道路公団) 6. 大気汚染防止法公布 騒音規制法公布 7. 水資源開発公団, 四国建設部を設置 7. 建設省創立20周年, 各種行事行われる 8. 国道41号線において土石流によりバス2台飛弾川に転落し104名死亡	2. 那賀川小見野々ダム蔭平開始 (四国電力) 2. 那賀川水系工事実施基本計画 6. 那賀川小見野々ダム蔭平発電所完成 (四国電力)	2. 大雪被害甚大 3. 坂州大橋架設竣工
44年 (1969)	5. 水資源開発公団早明浦ダム定礎式 6. 初の原始力船「むつ」進水 7. (阿)アポロ11号, 月面着陸, 人類初めて月面に立つ (24日帰還)	富岡築堤と長生橋を完成	4. 新川口橋開通
45年 (1970)	1. 本州四国連絡橋公団の新設決定 3. 日本万国博覧会 大阪千里で開幕 4. 過疎地域対策緊急措置法公布 4. 那賀道路事務所が相生土木事務所に昇格 6. 水資源開発公団四国建設部廃止, 水資源開発公団吉野川		3. 沢谷橋架設竣工

1970～1975

年 号 (西 曆)	政治・経済 (国, 県)	那 賀 川 関 係	その他 (市町村他)
昭和45年 (1970)	8. 台風9号四国地方の一部に局地的な豪雨をもたらす 8. 台風10号四国各地に強い風雨をもたらす 9. 台風9号, 10号等による災害を激甚災害として指定する政令公布 9. 新町地下駐車場新築工事着工 10. 伊方原始力発電所建設着工 (四国電力) 10. 道路構造令公布 12. 水質汚濁防止法公布		
46年 (1971)	環境庁発足 6. 沖繩返還協定, 宇宙中継により東京とワシントンで同時調印 7. 環境庁発足 (初代長官山中貞則) 11. 青函鉄道トンネル起工式挙行	8. 台風23号による大出水を記録 鷺敷町和食, 阿南市加茂谷に浸水被害, 細川内ダム着手の契機となる	3. 入延用水路隧道工事完成 木沢村, 過疎地域に指定される
47年 (1972)	3. 山陽新幹線 岡山まで開業 5. 日米沖繩返還協定が発効, 沖繩県が発足 5. 細川内ダム調査事務所開設 (徳島市) 6. 工業再配置促進法 6. 自然環境保全法公布 6. 田中角栄「日本列島改造論」を発表 7. 徳島, 鳴門, 小松島, 阿南4市と, 板野郡北島町が「公害対策連絡協議会」を発足 8. 徳島県下に赤潮が異常発生 養殖ハマチ約240万匹が全滅 12. 細川内ダム調査事務所 阿南市移設	9. 徳島県下に激しい雷雨, 那賀郡木沢村で1,027 mm	12. 特別森林地域開発林道 (スーパー林道) 起工
50年 (1975)	4. 室戸岬有料道路完成 (高知県) 5. エリザベス女王夫妻来日 ○ 吉野川ダム統合管理開始 (柳瀬ダム, 早明浦ダム, 新宮ダム, 池田ダム) 8. 政府は大三島橋, 大鳴門橋 因島大橋の着工時期を決定, 本州四国連絡橋に関する着工指示 8. 台風5号, 6号本土を襲う 台風5号は仁淀川, 吉野川	2. S46年台風出水による長安口ダム災害に関し地元より提訴	

1975～1977

年 号 (西 曆)	政治・経済 (国, 県)	那 賀 川 関 係	その他 (市町村他)
昭和50年 (1975)	上流部などで洪水と土砂害が発生 8. 台風6号では吉野川中流域および土器川を中心として洪水が発生 12. 末広大橋完成		
51年 (1976)	3. 新宮ダム, 旧吉野川河口堰 事業完成 (水資源開発公団) 3. 吉野川池田ダム完成 (水資源開発公団) 6. 米国でテートンダム決壊		
52年 (1977)	3. 四国地方建設局管内で最初の自転車駐車が鳴門市に設置された 6. 第5次治水事業5ヶ年計画の閣議決定 8. 勝浦川正木ダム完成	1. 那賀川水系濁水調査連絡協議会発足 (建, 県, 電力)	